

グレーに生まれた男の子

佐々野 寿子 訳

マルティンは生まれたばかり。

この世に頭をつき出したとたん、「ぱしん！」という音が聞こえました。

ママのテレシータ・カンタマニャーナスが、パパのマルセリーノ・カンタラピエドラにびんたを食らわせた音です。

なぜって？パパがママにこう言ったからです。

「テレシータ、この子はおれの子どもじゃない！おまえ、しゅっちよう先でつくってきたな！はだのいろがおれの家族とまったく違うじゃないか！」

じょうだんではなく、ホントにこう言ったのです。

次にマルティンの耳に飛びこんできたのは、「ぴしゃっ！」という音。助産婦さんのマンテキーリャスがマルティンのおしりをたたいた音でした。

でも、パパのマルセリーノがそう言ったのもムリはありません。

だって、ちっちゃなマルティンは、パパのカンタラピエドラ家のこんがり焼けた
えび色をしていませんでした。さらにママのカンタマニャーナス家の青白い色でも
ありません。

ちっちゃなマルティンのはだの色は、なんとグレー。

右あしの親ゆびのつま先から、髪の毛の最後の一本までくまなく全身、グレー一色だ
ったのです。

国じゅうのお医者さんがかけつけて、ちっちゃなマルティンを診察したことは言うまでもありません。あたまのてっぺんからあしのさきっぽまで、くまなく全身。だけど、なぜマルティンの肌がグレーなのかは、誰にもわかりませんでした。

お医者さんたちは、パパのマルセリーノ・カンタラピエドラとママのテレシータ・カ
ンタマニャーナスに向かって、こう言いました。

「心配しなくてもだいじょうぶ。お日様にたくさん当ればそのうち、息子さんは
申し分の**ない色**になりますよ、きっと。」

でも言うまでもなく、お日様にいくら当たってムダでした。

マルティンの肌は毎週ちょっとずつ、グレーに染まっていったのです。

でも、それだけじゃありませんでした。

パパとママは、マルティンが大きくなるにつれて、**心の中までグレー**ということに気づいたのです。

保育園に初めて行く日、マルティンは門のところで泣き出したりしませんでした。

ほかの子たちのように朝っぱらから大泣きしたってちっともおかしくないのに！

マルティンは小さなため息を2、3回つくと、頭をふりふりこう言いました。

「どうってことないのに、みんな大げさだなあ。パパたちはもう帰っていいよ、

じゃあね。」

マンサニーリャス先生がミステピータの物まねをしたときも、マルティンは大笑いなんてしませんでした。ミステピータは山たかぼうの衣装を着たかえるくん。みんなに英語を教えるため、イギリスの女王様の池からはるばるやってきたんですって。

しかも、ミステピータときたら、誰でも大笑いさせてしまう天才なんです！

だけどマルティンときたら、まゆげをかたっぽ、ぴくりと吊り上げただけ。

みんながおなかを抱えて大笑いしているときだって、両方のまゆげをつり上げるだけでした。

「なんだい、あんなの！」

ぼくのハムスターのグスタボのほうがずっとおもしろいよ。ひまわりの種をカリカリかじってるとこなんかサイコーだし。こんなの何がおかしいって言うんだ？」

って、となりに座ってるカルメンシータ・クラビコルディオスにつぶやきました。

でも、カルメンシータはかえるくんのジョークに大笑い中。マルティンが何を言っているのかよく聞こえませんでした。

ある日、大きな犬たちがワンワンほえながら校庭に入ってきました。トマス・カニヤナソスというりょうしさんの猟犬たちが、ヤマウズラを追いかけてきたのです。

声がかれるまでわめいてもおかしくない騒ぎだったのに、マルティンは悲鳴一つ上げませんでした！

ゴムとびをしていた女の子たちはみんな、しりもちをつきました。セラフィン・マラビーリヤスが決めるはずだったシュートもすっかりだいなし。

でも、マルティンはたったひとこと、口をとがらせてこう言い放っただけでした。

「サイテー！まゆげが乱れちゃったじゃないか！」

ママと一緒にいった南極で大きな白いくじらを見たときも、マルティンのかみの毛は1本たりとも逆立ったりしませんでした。

たいへいようの小さな島の火山が、つい目と鼻の先で噴火したときだって…

アフリカでキリンの赤ちゃんが生まれるのを見たときだってそうでした。キリンの赤ちゃんはお母さんキリンの足の間から**ずどん!**って生れ落ちるのです。でもマルティンは表情ひとつ変えず、いつもの通り。

そんなときまでびっくりしないなんて、どう考えたってへんなやつ!

「たいしたことないじゃん。これって前に**テレビ**で見たことあるもん。」

マルティンは冷たく、こう言い放っただけでした。

キリンの親子をハラハラ、ドキドキしながら見守っていたママの目の前で。

マルティンはきっと、体も心もグレーのままに違いない、このまま**ずー**っと。

家族はみんな、マルティンが大人になった様子をありありと思い浮かべることができました。グレーのオフィスで、グレーのスーツとグレーのネクタイ姿ではたらくマルティン。しごとはもちろん、世界中にグレーの子供たちを送りこむこと。

でも、**ずー**っとそのままでいられることって、ホントのところ、なかなかありませんよね。グレーだっておんなじです。

その日は突然やってきました。

マルティンは、ひまわりの種をカリカリかじるグスタボを、くらい顔でじいーっと見つめていました。

突然、グスタボはのどを「うっ」とつまらせ、4回せき込んだかと思うとぴくりとも動かなくなりました。すあな代わりに古いソックスのすぐそばで。

マルティンのまゆげが2本ともぴくん！とつりあがりました。ため息を2回ほどついたけど、かみの毛は1本も逆立たず、口をとがらせてこう言い放ちました。「サイテー！」。

どこまでもくらく、グレー一色のままで。

そう、いつもどおりのマルティンでした。

ところが、そのとき突然、マルティンはみぞおちのあたりにこみ上げてくるものを感じました。

なみだがひとつぶ、ぽろりん、のどをせり上がり、マルティンのほっぺをすべり落ちていきました。

ぽろりん。

ぽろりん。

うわああああっ！マルティンののどびこの奥からさけび声がひとつ、飛び出しました。

うわああああっ！

うわああああっ！

そのとき。グスタボが急に気味の悪い音とともに、のどにつかえていたヒマワリの種を吐き出しました。力いっぱい吐き出された種は、目玉をくりぬくような勢いでマルティンの片目にぶち当たり、チカチカの火花がマルティンの頭の中いっぱい飛び散りました。

あっはっは！ 笑い声が一つ、マルティンの口から飛び出しました。

あっはっは！

あっはっは！

あっはっは！…

…部屋中、すみずみまでマルティンの笑い声でいっぱいになりました。

そして突然、マルティンはおかしくてたまらなくなり、**大声で思いっきり笑**

い出しました。今まで聞いたミステピータのジョークをぜんぶ思い出して。マルティンが大笑いを1つするたび、グレーの大きな波がいくつもいくつも、あっちこちにふき出していきました。

それからマルティンは**泣いて泣いて泣きまくりました。**保育園の門で泣かなかった朝をぜんぶ思い出して。マルティンの流すなみだのひとつひとつには、グレーのしずくが入っていました。なみだはマルティンのほっぺをつたい、床までしたたり落ちていきました。

その後、マルティンは**大声で叫んで叫んで叫びまくりました。**ワンワン吠えながらヤマウズラを追いかける大きな猟犬たちを思い出して。マルティンの叫び声にはどれも、グレーの影がぴったりはりついていました。叫び声はマルティンの口から窓のはるかかなたへと飛び去っていきました。

そして、マルティンの体中の毛という毛がぜんぶ、いっせいに逆立ち
ました。ママと一緒に旅行で見たいろんなことをひとつ残らず思い出して。

体の毛の1本1本が逆立つたびに、グレーの汗がひとつぶ、蒸気となってはパァッ
と消えていきました。

「いったいぜんたい、何の騒ぎ？」パパとママが部屋に飛び込んできました。

2人ともマルティンを見てびっくりぎょうてん、開いた口がふさがりません。

だって、あのマルティンが、笑って、泣いて、叫んでいるのですから！

それに、マルティンの体中の毛という毛がぜんぶ逆立っているではありませんか。

マルティンのはだの色は、パパと同じこんがり焼けた**えび色**に変わっていました。

右あしの親ゆびのつま先から、**さいごから2本目**のかみの毛までぜんぶ。

髪の毛の最後の一本はどうなっていたかですって？

もちろん、ママの家族と同じ、青白い色に変わっていたのです。